楊維楨『覧古』詩について

要木純一

一

楊維楨（一二九六～一三七〇）の別集『鉄崖先生古楽府』（四部叢刊影印本）の巻八は、その全てが、『覧古』と題された五言古詩によって占められている。

従来、楊維楨の代表作と言えば、『鉄崖先生古楽府』巻一から巻七に収められている、七言を基調として、長短句おりまぜた、いわゆる「古楽府」がそうであるとされている。本人も自負するところの大きかった作品群である。あるいは、当人にとっては半ば手ずさみの感があったかと思われるが、後世になって評価が異常に高くなった、巻十に収められた七言絶句、そのなかでも特に「西湖竹枝歌」が代表作とされることもある。また、巻九を占める五言絶句・・・楊維楨の所謂「小楽府」を同時代の作者を圧倒するものと考える評者もいる。ところが、決して量的にひけを取らない、五言古詩の『覧古』詩については殆ど言及されない。低く評価されて来た、それゆえに無視されていたのではないかと、思われる節がある。

そもそも、元人全体が、五言古詩を得意としなかったという説がある。明代の批評家、胡応麟はその著『詩藪』（上海古籍出版社　一九五八年第1版　一九七九年新1版）外編巻六「元」で、「元の五言古は、率ね唐人を祖とす」と指摘して、元の諸名家がそれぞれ唐の大家の模倣に努めたことを列挙した後、次のようにいう。

「……然れども藩籬は稍や窺うも、閫域は殊に遠く、砕金は時に獲るも、完璧は甚だ稀なり。蓋し宋の失は、創撰に

過ぎ、創撰の内に、又之を太だ深きに失す。元の失は、臨模に過ぎ、臨模の中に、又之を太だ浅きに失す」

前代の唐代に対して独創性を狙いすぎる宋詩もいただけないが、元人の五言古詩は、唐詩の浅薄な物まねに過ぎないと述べる。そして、このように、元に五言古詩の名作が少ない、それは他の時代と比べて特異なことだとまで極言する。別の項。

「七言律は最も結構し難し、五言古は差や周旋し易し。元人は然らず、七言律の韻の称う者は多きも、五言古の完善なる者は寡し、力を致すと力を致さざると耳」

最も簡単なはずの五言古詩のジャンルで、元人の作は低調である。それは、元人がこのジャンルに力を入れなかったからだというのだ。また、宋元とも五言古詩が振るわなかったとも主張する。また別の項。

「宋の五言律は元に勝り、元の七言律は宋に勝る。歌行絶句は、皆元人勝る。五言古に至りては、倶に言うに足らず矣」

たしかに胡氏の言は、我々をして首肯せしめる点が多い。特に楊維楨のこの『覧古』四十二首を一瞥するとその感が益々強くなる。その冒頭を飾る「其一」の詩を見るだけで、これが文学における個性を過激なまでに主張したあの楊維楨の詩なのかと、驚かせるに十分である。（以下、『覧古』詩については、『鉄崖先生古楽府』（四部叢刊影印本）を底本とし、『楊維楨詩集』（鄒志方点校　浙江古籍出版社　一九九四）で校定した。詩の番号はもと底本に無し。『楊維楨詩集』に拠った）

「晋師は天王を納め、大義は白日に披す。尹固は蘖子に附し、籍を奉じて蛮夷に奔る。道に周郊の婦に逢うに、三歳は爾の大期ならんと。三年にして尹固は死す、婦言は蓍亀の如し（「周郊」はもと「秋郊」に作る。『楊維楨詩集』によって改める）」

この詩は『列女伝』所載の故事に基づいている。四部叢刊本『古列女伝』巻八の「周郊婦人」の条。

「周郊婦人なる者は、周大夫尹固の郊に遇いたるの婦人也。周赧王の時、王子朝は寵を怙みて乱を為し、敬王と立つを争う。敬王入るを得ず。尹固は、召伯盈、原伯魯と、子朝に附す。春秋魯昭二年六月（「二十六年」の誤りであろう）

晋師は王を納む。尹固は子朝と周の典籍を奉じて、之（「楚」に作るべきであろう）に出奔す。数日にして道に周郊に還る。婦人は郊に遇いて、之を尤めて曰く、処れば則ち人に勧めて禍を為さしめ、行けば則ち数日にして而して反る。是其れ三歳を過ぎざる乎。昭公二十九年に至りて、京師果たして尹固を殺す。君子謂う、周郊の婦人は尹氏の乱を助くるを悪み、天道の祐けざるを知る。示すに大期を以てし、終に其の言の如し。云う、辟を取ること遠からず、昊天忒わず。此の謂い也」

「晋師」、「納王」、「尹固」、「附」、「奉籍」、「奔」、「道」、「周郊婦」、「三歳」、「大期」等々、ほとんど『列女伝』の記述を襲っている。「蛮夷に奔る」は、原典にそのまま無いようだが、尹固が楚に逃げたことである。この『列女伝』がさらに典拠としているであろう『春秋左氏伝』昭公二十六年の伝にはそう書かれているし、括弧内にあるように「之」が「楚」の誤りならば、単に韻を合わせるために、語を換えたのであろう。このように、原典に対して何ら特別な潤色を加えた詩ではない。淡々と事実を述べているに過ぎないといってもよい。なるほど、敬王を王位につけた晋の「大義」を附加している。しかし、これは伝統的な観点を一歩も出ないものであって、楊維楨にわざわざ言ってもらうほどのことではない。王子朝も、王位簒奪を企てた当然非難されるべき人物で、「蘖子」ということばに楊維楨独自の思いをこめているわけではない。最後の「婦言は蓍亀の如し」も、『列女伝』の「終に其の言の如し」を詩的に言い換えたに過ぎないと見るのが普通であろう。強力な主張でもって、詩を結んだとは到底思えない。

これだけでは、原典を要約しただけの詩ではないか。いや、要約という点でも、合格点はもらえないのではないか。『列女伝』にあるように、尹固は楚に逃げる途中で周に引き返したのであった。だからこそ、「行けば則ち数日にして反る」という周郊婦人の尹固に対する非難のことばが発せられるのである。それをあたかも蛮夷に逃げる途中に出会ったかのように誤解させるような、この詩の省略法には、史実を十二分に知る読者が対象であるにしても、やはり、釈然としないものを感じる。

『覧古』詩其二も同様に、楊維楨らしさの見られない、余りに素朴な筆致のようにみうけられる。

「出姜は哭して市を過ぎ、天を呼べば天実に聞く。市人は皆涕下る、魯賊（「魯賦」（すなわち魯の財産の意）に作る

べきだと思うが、未詳）当に誰か分かたん。出姜は魯に帰（もと欠文。『楊維楨詩集』によって補う）らず、麟書は其の君を誅せり」

これは、『春秋左氏伝』文公十八年を典拠とした詩である。経の「夫人姜氏斉に帰る」に対する伝に則っている。文公の死後、後を嗣ぐべき息子を殺された、文公夫人の姜氏が、悲嘆の余り、魯を捨てて斉に帰ってしまう。

「夫人姜氏斉に帰るとは、大いに帰る也。将に行かんとして、哭して而して市を過ぎて曰く、天乎（よ）仲（姜氏の子を殺した襄仲）は不道を為し、適（嫡）を殺して庶を立つ。市人は皆哭す。魯人は之を哀姜と謂う」

この記述を詩の形式に換えたに過ぎないと、見なさざるを得まい。それも、僅か五言六句の短さである。史実をよく記憶した読者のみを対象としたような、文字の節約ぶりである。末二句に、楊維楨独特の見解がこめられているように見えるが、これも経「夫人姜氏斉に帰る」が所謂「春秋の筆法」であって、文公の後を襲った宣公（及び宣公を擁立した襄仲）を非難したということであれば、割合に普通の史観であって、それほどに感心するべきものでもあるまい。

楊維楨の門人で、『鉄崖先生古楽府』を編集した呉復が、その序にいう。

「先生は会稽に在る時、日に詩一首を課す。史伝に出入して、積みて千余篇に至る。晩年に取りて而して之を読み、忽ち自ら笑いて曰く、此豈に詩有らん哉（や）。亟やかに童を呼びて之を焚かしめ、一篇も遺さず。今存する所の者は皆先生の銭塘、太湖、洞庭間に在りての得る所の者と云う」

『楊維禎年譜』（孫小力著　復旦大学出版社　一九九七）によれば、楊維楨が会稽で史伝に出入して詩作に励んだのは、至順元年（一三三〇）に天台の官を免ぜられた後、至順二年（一三三一）から元統元年（一三三三）大桐山にこもったときであるという。そののち、元統二年（一三三四）に銭清の塩場司令に転ぜられる。

かつて、筆者は、この『覧古』詩こそが、楊維楨が童に焚かせたと称する詩で、実は手元に遺していたのではないか、と臆測、邪推をしたことがある。正に、「此豈に詩有らん哉」といわれてもしょうがない内容だと考えたからである。しかし、呉復の言、それは恐らく楊維楨のことばを伝えたものであろうが、それを信じるならば、『覧古』詩は決して焚かれた詩ではなく、堂々たる大家となってからの作品であるということになる。筆者も、現在では、楊維楨がこの『覧

古』詩にこめた思いというか、企みについて、いろいろ考えるところが生じてきた。本論を書く所以である。

二

『覧古』詩が収められている、『鉄崖先生古楽府』巻八の巻末に、呉復の評語が附せられている。

「已上凡そ四十二首。蓋し太白の覧古、少陵の遣興を迹（お）いて而して作る也。事は史断に関わると雖も、而して中に詩法の存する有り焉。古詩を作る者は、其れ学ぶ無かる可けん乎（や）」

この評語を仔細に検討してこそ、駄作と非難されかねない、『覧古』詩を作った、楊維楨の真意をつかむことが出来ると筆者は考える。簡単で素っ気ない文章であるが、おそらく呉復の他の評語と同様、楊維楨から直接間接にこの覧古詩制作にあたって意図するところを伝授されたうえでの言葉であると思うのである。

この評語にしたがって、まず、太白、すなわち李白の『覧古』の迹を追ったとはどういうことか、ついで少陵、すなわち杜甫の『遣興』との関係、そして楊維楨が意図した『覧古』詩における詩法とは何か、という順番で以下論をすすめたい。

楊維楨が李白を手本としたことは、衆目の一致するところであろう。李白の作品を模倣したものが多数存在する。しかし、この『覧古』詩は、李白の同じ詩題を襲ったものでありながら、李白のそれとは印象をかなり異とする。

李白の『覧古』詩を引こう。『覧古』と名付けるものは計二首。四部叢刊本『分類補注李太白詩』巻二十二、『懐古』の部にそれらは収められている。

「　蘇台覧古

旧苑の荒台楊柳新たなり、菱歌清唱し春に勝えず。只今唯だ江西の月有るのみ、曾て照らせり呉王宮裏の人。

越中覧古

越王句践呉を破りて帰り、義士家に還りて尽く錦衣なり。宮女は花の如く春殿に満つ、只今唯だ鷓鴣の飛ぶ有るのみ」

これらは、実際に呉、越の旧跡を覧て詠んだ詩である。対して、楊維楨の『覧古』詩は名所旧跡を前にしているのではなく、あくまでも、史書を前にしているのである。いにしえの姿の跡形もない旧跡を、目の当たりにしてわき起こる感懐が、李白の『覧古』のテーマの一つであろうが、楊維楨の『覧古』詩にはそのような時間の推移の感覚は皆無である。そもそも、李白の『覧古』は七言絶句であることだけからして、楊維楨の五言古詩の『覧古』と似て非なるものであることは言うまでもないことであった。

李白の『覧古』詩は、李白が崇拝した陳子昂の『覧古』を当然意識しているであろう。楊維楨の『覧古』詩は、これと比べてどうであろうか。『陳伯玉文集』（四部叢刊本）巻二に、「薊丘覧古　盧居士蔵用に贈る」と題して、六首並びに序を収めるが、内最初の三首を引く。

「軒轅台

北のかた薊丘に登りて望み、古えの軒轅台を求む。応龍は已に見えず、牧馬は黄埃を生ず。尚想う広成子の、迹を白雲の隈に遺すを。

燕昭王

南のかた碣石館に登り、遙かに黄金台を望む。丘陵は尽く喬木なり、昭王は安くに在り哉。覇図は悵として已わんぬ矣、馬を駆りて復た帰来す。

楽生

王道已に淪昧、戦国競いて兵を貪る。楽生何ぞ感激して、義に仗りて斉城を下す。雄図竟に中夭し、歎きを遺して阿衡に寄す」

序に「燕の旧都を歴観す」とあるので明らかなように、これらも、実際に戦国時代の燕の遺跡を前にしての詩である。「軒轅台」、「燕昭王」は遺跡を「望」んだり、「登」ったり、「馬を駆」ったり、遊覧の詩であることを字句で明らかに

示している。「丘陵は尽く喬木なり、昭王は安くに在り哉」の部分などは、現在と過去との時間の隔たりを意識している点は李白の『覧古』と同様である。しかし、「楽生」以下「燕太子」、「田光先生」、「鄒子」になると、遊覧の記述はなくなり、遺跡を前にして詠んだとして鑑賞するとそれなりに深い感慨を引き起こすが、推移の感覚から離れて、独立した詩として読むことも可能である。そしてもちろん五言古詩であり、その短さも楊維楨の『覧古』詩と相通じる。

さらに覧古詩の系譜をさかのぼろう。すると、盧諶の『覧古』に行き当たる。「覧古」という題の詩では、これが現存で最も早いものであろう。四部叢刊本『六臣註文選』巻二十二所収のものを引く。

「趙氏に和璧有り、天下伝わらざる無し。秦人来りて市（あきな）うを求むるも、厥の価は徒らに空言なり。之に与うれば将に売ら見んとし、与えざれば患いを致すを恐る。才を簡（えら）びて行李に備え、国命をして全から令めんことを図る。藺生は下位に在るも、繆子は其の賢を称う。辞を奉じて馳せて境を出で、軾に伏して径ちに関に入る。秦王は殿に御して坐し、趙使は節を擁して前む。袂を揮いて金柱を睨み、身と玉と倶に捐てんことを要す。連城は既に偽りて往き、荊玉も亦た真に還る。爰に澠池の会に在りて、二主尅く交歓す。昭襄は力を負（たの）まんと欲するも、相如は其の端を折（くじ）く。眥血は下りて襟を霑し、怒髪は上りて冠を衝く。西缶は終いに双りながら撃ち、東瑟は隻りにては弾かず。生を捨つるは豈に易からざらんや、死に処するは誠に独り難し。稜威す章台の顛、彊禦も亦た干さず。節を屈す邯鄲の中、首を俛して忍びて軒を回らす。廉公は何為る者ぞ、荊を負いて厥の譽ちを謝す。智勇は当世を蓋い、弛と張と我をして歎ぜ使む」

五言古詩の詩形で、古跡を目の当たりにした上で読まれた詩でないという点で、かなり楊維楨の『覧古』詩に似ているといえそうだが、やはり違う。こちらの方が圧倒的に分量が多く、微に入り細に穿った物語的描写に富んでいる。楊維楨のは、最長高々十二句。読者の知識を前提として、冗舌に物語ることを欲せず、人物のせいぜい二、三のエピソードを点綴するに過ぎない。

この詩は『文選』の「詠史」の部に収められている。さらに「覧古」という題名の枠を離れて、「詠史」のジャンルを遡っていきたいが、詠史詩となると、中国文学史上あまりに重要で対象が大きすぎる。同部に収められている左思や

王粲の作品等当然言及すべきものを追っていく余裕は今ない。ここでは、他を顧みず、真偽はともかく、「詠史」の祖とされる、班固の作と伝えられるものに直ちに赴こう。四部叢刊本『六臣註文選』巻三十六　王融「永明九年策秀才文」の李善注に引かれ、『詩品』（『歴代詩話』中華書局　一九八二所収）序で「孟堅（班固）は才流にして、而して掌故に老なり。其の詠史を観れば、感歎の詞有り」とたたえられるものである。

「三王徳弥よ薄く、惟れ後に肉刑を用いる。太蒼は有罪をして、道を長安城に作ら令む。自ら恨むらく身に子無ければ、困急して独り煢煢たりと。小女父の言を痛むも、死する者は復たと生きず。上書して闕下に詣り、古を思いて鶏鳴を歌う。憂心摧きて折裂し、晨風は激声を揚ぐ。聖漢の孝文帝は、惻然として至情に感ず。百男何ぞ憒憒として、一りの緹縈に如かざる」

刑罰を受ける父を、少女の身でありながら救おうとする、緹縈の故事を述べる。分量は多いことは多いが、それでもなお楊維楨の『覧古』の筆致に相通ずるものを感じる。物語的な細かな描写は避け、二、三の印象的なエピソードを選んで、単刀直入に感懐を述べているような点である。そして、総じて大人物の偉大さを詠むのではなくて、弱点の多い小人物、あるいは史上有名であっても、一般人と共通点を持つような人物を、主人公に、また、相手役に選ぶような点である。

覧古話また詠史詩の伝統の中で、李白の覧古詩は、七言絶句であることを初めとして、かなり特異なようであり、楊維楨の『覧古』詩の模倣の対象ではないように一見思われるが、以上のように考えると、やはり伝統の中に有るものといわねばならない。「蘇台覧古」にあらわれる「呉王宮裏の人」、「越中覧古」にあらわれる「宮女」や「義士」。これらは、李白にとって、呉王や越王よりも大切な表現対象であった。現実には失われ、人々の記憶に留まったり、認識に入ることはなくなったが、少なくとも文学の対象としては永遠に失われてはならないもの達であった。

同様にか弱く、歴史の中に埋もれてしまいそうな緹縈、ちっぽけな存在であったのが、父を救うという男勝りの行動をしでかしたことが、班固の筆によって辛うじて後世に伝えられるべく表現されたことに、楊維楨は興趣を感じていたらしく、「銀瓶女」という詩の中で彼女の名を使っている。『楊維楨詩集』「鉄崖詠史」巻八所収の「銀瓶女」。

「岳家の父は、国を之城く。秦家の奴は、国を之傾く。皇天は霊ならず、我が父と兄とを殺す。嗟あ我れ銀瓶、我父の為には緹縈。生きては父の死を贖わず、生まるる無きに如かず。千尺の井、一尺の瓶、瓶中の水に精衛鳴く」

この「銀瓶女」は、文淵閣四庫全書本『鉄崖古楽府補』にも載せられているが、それには次の序がついている。

「宋の岳鄂公（飛）の幼女也。王は収容せ被れ、女は銀瓶を負いて投水して死す。今祠は浙憲司の右に在り」

精衛、緹縈、銀瓶と続く、運命にうちひしがれながら、真っ直ぐに生きていこうとする少女達の系譜を一首の中に盛り込んでいる。その魂に迫られるように、楊維楨は鎮魂の歌を作っていく。歴史から、何か教訓を得ようとか、新しい史観をうち立てようとか、その志向は、覧古詩また詠史詩に伝統的に濃厚であって、楊維楨の『覧古』詩にもその側面がたしかにある。だが、その志向をひとまずおさえて、あまり自分の考えを表に打ち出さずに、ただ「古えを覧る」だけ、過去の人々の、失われゆく営為や心情にひたすら思いを致す側面も強いと思う。あたかもそうすることが、時間の流れを押しとどめようとする、抵抗であるかのごとく。こう考えると、楊維楨の『覧古』詩が李白のそれを学んだというのがよくわかる気がする。たとい、遺跡を目の当たりに見た詩でないにせよ、詩形を異にするにせよ、底流においては、伝統的とされる他の『覧古』詩や『詠史』詩よりも、楊維楨の趣向に最も近いところに李白の『覧古』詩はあったのではないか。

このような楊維楨『覧古』詩の作風の由来をどこに求めるべきか。筆者は、宋元革命において、真っ直ぐに生きた多くの人が非運に死んでいって、忘れ去られようとすることに対する悲哀の情に求めたい。楊維楨『覧古』詩、其四十一。

「東人は降款を送り、西人は降城を納む。長沙の李太守は、死を誓いて城に盟わず。高楼一たび火を挙げ、老稚は同に焦冥す」

李太守とは、李芾（『宋史』巻二百九に伝あり）。元に襄州城を明け渡すことになっても、降伏するを肯んぜず、自害する。それはまだしも、敵の辱めを受けさせぬために、さらに一族を皆殺しにするという、痛ましい話である。教訓を述べないのはもちろん、自己の感懐も述べない。冷酷な歴史の前では、ただ拱手傍観するのみ。しかし、この悲劇は忘れられてはならない、楊維楨にとってはそう思うこと自体が大切なのであり、一種の鎮魂なのである。李白の作品の中

で、歴史を扱い、それに李白自身の生き方を重ねるものとしては、雄渾な「古風」があり、李白の五言古詩の代表作として指を屈するべきであるが、楊維楨が同じ五言古詩体を用いながら、「古風」の祖述ではなく、「古風」に比べれば軽薄短小で主張に乏しい七言絶句の「覧古」の祖述に向かったのは、如上の理由によると考える。

三

張雨の「『鉄崖先生古楽府』叙」によれば、楊維楨の古楽府は、

「上は漢魏に法り、而して少陵二李の間に出入す」

という。杜甫、李白、李賀に学んだという。このうち、李白、李賀については読者をしてほぼ納得せしめるであろうが、杜甫については直ちには首肯しがたい。もっとも、『鉄崖先生古楽府』の巻十所収の「漫興」七首では、自序に、

「杜を学ぶものは、必ず其の情性語言を得て、而して後に可なり。其の情性語言を得るには、必ず其の漫興より始むべし」

と述べて、杜甫の「慢興」詩の模作を披露している。楊維楨が杜甫の主流の作品ではなくて、内容としても韻律としても弛緩のみられる「慢興」のごとき詩に興味があったことがわかる。しかし、楊維楨が杜甫の「遣興」の後を追って『覧古』詩を作ったと、呉復が述べているのは、これと意味合いが違うようである。それでは「遣興」は、楊維楨の『覧古』詩というこのかなり奇異な詩群に、どのような影響を与えたのであろうか。

杜甫の「遣興」と題する詩は二十首もある。その全てが影響を与えたのではなくて、筆者のみるところ、楊維楨が意識したのはつぎの遣興五首である。四部叢刊本『分門集注杜工部集』巻十三懐古の部にある。

「　　其一

蟄龍は三冬に臥し、老鶴は万里の心。昔時の賢俊の人、未だ遇わざること猶お今を視るが如し。嵇康は死を得ず、孔明は知音有り。又壠底の松の如く、用舎は尋ぬる所に在り。大いなる哉霜雪の榦、歳久しくして枯林と為る。

其二

昔者龎徳公は、未だ曽て州府に入らず。襄陽の耆旧の間に、処士は節独り苦しむ。豈に時を済うの策無からんや、終いに竟いに羅罟を畏る。林茂りて鳥は帰る有り、水深くして魚は聚うを知る。家を挙げて鹿門に隠る、劉表は焉んぞ取るを得んや。

其三

陶潜は俗を避くるの翁なるも、未だ必ずしも道に達する能わず。其の著わす詩集を観るに、頗る亦た枯槁を恨む。達生は豈に是れ足らんや、黙識は蓋し早からず。子有り賢と愚と、何ぞ其れ懐抱に掛くるや。

其四

賀公は雅に呉語にして、位に在りては常に清狂なりき。上疏して骸骨を乞い、黄冠にして故郷に帰る。爽気は致す可からず、斯の人今や則ち亡し。山陰の一茅宇、江海は日に清涼ならん。

其五

吾は憐れむ孟浩然の、短褐にして長夜に即くを。詩を賦すること何ぞ必ずしも多かるべき、往々にして鮑謝を凌ぐ。清江旧魚空しく、春雨甘蔗を余す。東南の雲を望む毎に、人をして幾たびか悲吒せ令むる」

其五の孟浩然を除いて、対象となった人物はみな楊維楨の『覧古』詩に以下のように扱われている。

「　其二十

会稽の嵇叔夜、才気は浩として群ならず。平生鍛に癖す、余の好むは琴尊に在り。如かず一たび長嘯して、琴を携えて蘇門に学ぶに。憐む可し広陵散、奇弄は今に聞ゆる無し。

其十八

襄陽に高士有り、生産は曽て治めず。何を以て妻子に遺す、鹿門に深期有り。籍籍として歯牙に論じ、龍鳳もて諸児に名づく。諸葛床下に拝するは、是れ圯橋の師なる可けんや。

其二十六

青青たる五柳の宅、貧にして三径の資無し。去りて建威の幕に参ずるは、貧の為にして良に亦た非なり。彭沢八十日、胡為れぞ遽かに来り帰るや。乃ち知る決然として逝くは、郷里の児の為に非ず。首悪の王休元、酒も亦た辞する所無し。華軒我を載さんと欲すれば、我が心詎ぞ能く違わん。

其三十六

小児の賀季真よ、官を棄て亦た宅を棄つ。遠く王道者に謁して、去りて問う術の黄白なるを。何物ぞ袖中に蔵する、道を去ること万里隔たる」

このようにみると、呉復のいうように、明らかに、杜甫の「遣興」に倣っているといってよいようである。ただ、その倣い方に、単純な祖述を良しとしない、楊維楨らしいあくの強さが感じられる。

「遣興」其一が、嵇康の死を得ず、人生に失敗したことを、『覧古』其二十も詠む。しかし、「大いなる哉霜雪の榦、歳久しくして枯林と為る」に顕著な、時間の推移の感覚を、楊維楨はおそらく意図的に詠まない。あくまでも、淡々と嵇康のエピソードを語るスタンスである。

「遣興」其二。杜甫の詩は龎徳公の故事を借りて、己の現在の心情を語っているのはほぼ間違いない。「処士は節独り苦しむ」、「豈に時を済うの策無からんや」。杜甫の熱心な読者ならば、当然杜甫自身の鬱屈した気持ちを発露したものとして読むであろう。対して、『覧古』其十八に楊維楨自身の悲憤慷慨を感じる読者がいようか。巧みなレトリックには感嘆するかもしれないが。

杜甫の「情性語言」をやや深いレベルで模倣しようとするのが、「遣興」其三に対する、『覧古』其二十六である。伝統的な見方に異を唱えて、陶淵明が「未だ必ずしも道に達する能わ」ざる人物であったと、喝破する杜甫に倣って、楊維楨は更に陶淵明を揶揄する如き口吻で扱う。貧乏の為に仕官のやむなきに到ったのに同情の余地はなく、辞任も唐突で、伝説にいうように、郷里の児に頭をさげたくなかったというわけでもあるまい。気にくわない相手でも酒を飲むのを断らないし、立派な官職をあてがってくれるならば喜んでついたことであろう。伝統的な人物把握をひっくり返すおもしろさは確かにあり、杜甫の傾向をより拡大したといえよう。ただ楊維楨には考え違いがあるかもしれないと筆者は

思う。

『杜詩詳註』巻七（中華書局　一九七九）では、この「遣興」第三首の注に、

「詩に微詞有るが若き者は、蓋し陶集を借りて而して其の意を翻すならん。故（ことさら）に曠達を為して以て自ら遣る耳、初めより先賢を譏刺するに非ざる也」

とある。この詩でも、杜甫は自らの心の痛みを陶淵明に託しているととるのが自然であろう。「其の著す詩集を観」て、恐らく何遍も読みふけった上であえて陶淵明を批判するような言葉を漏らすところにこの詩の主眼がある。一方、楊維楨は陶淵明の既成の像を壊すおもしろさにのみ耽っているようである。楊維楨も杜甫の詩の託するところには気付いていたかも知れない。たといそうだとしても、気付かぬ振りをして、陶淵明をただただ罵倒するのである。歴史に興味を持ちながら、歴史に対するある種の冷淡さが、そこに感じられる。過去の人物を我が身に引き替えて、教訓を引き出したり、感情を迸らせたり、自らを慰めたり、そういうことから遠いところに楊維楨はいる。あるいはいようとする。

陶淵明に常に批判的だったわけではない。『楊維楨詩集』鉄崖逸編巻五「題陶淵明漉酒図」、

「義熙の老人は羲上の人、一生酒を嗜み天真を見わす。山中今日新酒熟し、酒を漉すに頭上の巾を知らず。酒醒め乱髪は騒屑を吹き、架上の烏紗は糟糵を洗う。客来りて忽ち怪しむ頭に冠せざるを、巾冠は豈に我輩の為に設けんや。故人具を設けて道南に在り、老人一笑す猩猩の貧なるを。東林の法師は酒社に非ず、眉を攢めて社に入るは吾何ぞ堪えん。家は貧しきも檀公の肉を食らわず、肯えて劉家天子の禄を食わんや。頽然として径ちに酔い臥して坦腹す、爾阿宏の来たりて足を奉ずるを笑う」

東晋を簒奪した劉宋に仕えるのを潔しとしなかったと述べるなど、『覧古』詩における陶淵明の評価と雲泥の差がある。すると、『覧古』詩というジャンルだからこそ、陶淵明を普通と違うようにわざととらえたい、というのが、楊維楨の意図であったのかも知れない。

「遣興」其四で、杜甫は亡くなった同時代人賀知章をたたえる。「常に清狂」であったと。そして、亡くなった後の旧宅を遙かに想像して、推移の悲哀に浸って結ぶ。楊維楨にとっては賀知章は、もはや過去の人でしかない。杜甫のよ

うに思いをこめることは出来ない。『覧古』其三十六では、賀知章が、王老という道士に黄白の術を学ぼうとして、真珠を与えたところ、王老が餅に換えてしまった。惜しいと思ったのを見抜かれて、けちな性質が除かれなければ教えられないといわれたという故事（『太平広記』中華書局　一九八一　巻四十二　賀知章の項）のみを、わずか六句でまとめて、賀知章をいわば切って捨てるのである。杜甫の「遣興」に心酔して学ぶ外見を装いながら、杜甫の賀知章への傾倒を嘲うような、辛辣で冷笑的な一面が奥に隠されているようである。

結局、これらの『覧古』詩は杜甫の「遣興」に対するオマージュとして作られたといってもよいのかも知れないが、ずいぶんひねくれたオマージュではないか。

歴史上の偉大な人物だってこの程度のものに過ぎないと、突き放すようなこの楊維楨の視線が、尊敬しているはずの杜甫自身にも向かっているということを、隠微な形で表明していると疑われるのが、『覧古』詩の其三十七である。かつて、杜甫のパトロンとなった厳武の故事を詠む。

「厳家の児よ。八歳にして父の姫を殺し、厳家の父は奇と称す。虎豺の悪しきを養成し、腐儒は虎の髭を弄す。嗟吁豺虎は天早く斃し、七十の慈母は官婢を免る」

杜甫が「乾坤一腐儒」と自称している（「旅夜書懐」）のを意識しているとするなら、「腐儒は虎の髭を弄す」とはずいぶんな言い方ではないか。批判とまではいかず、杜甫を憐れんでいるということかも知れないが、それでも敬意を失している。運命に翻弄される杜甫を、掛値なしに等身大にとらえているといえそうである。

かといって杜甫に反発して、李白の肩を持っているというわけではない。李白も楊維楨の冷たい視線を免れない。『覧古』詩其二十八。

「羲之は東床に在り、風操は夙に称する所。藍田誉れは転た重きに、胡ぞ乃ち意平らかならざるか。出でて弔えば屈（もと「曲」に作る。『楊維楨詩集』に拠って改める）は我に在り、反って悪むは固より其の情。此を以て悻悻として死に、匹婦の軽きに異なる無し」

「風操は夙に称する所」である王羲之の、悪しきエピソードだけを集めた感のある詩である。すぐれた人物と認めつ

つもその意固地を指摘する。筆者の考えでは、この詩は、逆に王羲之の風雅を手放しで称える、李白の「王右軍」詩を意識して、あえて反対の方向に向かって王羲之をとらえたものであろう。「王右軍」は、先に引用した「蘇台覧古」、「越中覧古」と同様、四部叢刊本『分類補注李太白詩』巻二十二、『懐古』の部に収められる。

「　　王右軍

右軍は本清真、瀟灑にして風塵に在り。山陰に羽客過ぎ、此の鵞を好む賓を愛す。素を掃いて道経を写し、筆は精にして妙神に入る。書き罷りて鵞を籠めて去る、何ぞ曾て主人に別せんや」

大書家にして清真な王羲之という、伝統的な像、それを李白も援用しているわけだが、その像に飽き足らないものを楊維楨は感じたに違いない。文学的に成功しているとはいえないかも知れないが、李白や杜甫を継承しつつも、楊維楨なりの個性を、独創を、「覧古」詩に加えようとする意志は感じ取れる。

四

では、他の詩体（古楽府、七言絶句、小楽府）でなくて、この五言古詩でなければ、表現できなかったものとは何か。言い換えれば、余り文学的価値は大といえないにも関わらず、五言古詩体の『覧古』詩の制作に楊維楨を向かわしめたものは一体何であろうか。その一つの答えを得るために、呉復の「事は史断に関わると雖も、而して中に詩法の存する有り焉」という評語の分析にとりかかることにしよう。

確かに「覧古」詩は史断の詩である。しかし、上にみてきたように、あまりにありふれた史断か、そうでなければ、楊維楨独自のあまりにひねくれた史断で、大方の同意が得られそうもない傾きがある。楊維楨自身はどう思っていたか知らないが、『覧古』詩の重点はおそらく史断にはない。呉復の語の後半にいうように、「詩法」にこそ存するのである。その「詩法」であるが、筆者はそれほど深く、細かく分析する必要はないと思う。要するに、近体詩、及びその影響下に作られた古詩では、使いにくくなってきた、簡古な筆致を、拙劣、単純だというそしりを恐れないで使おうという底

のレトリックとして考えておきたい。この程度に把握しておくことが、結局『覧古』詩を読む上で一番有効なのではないかと筆者は思う。

では、具体的にはどのような筆致か。

杜甫の「遣興」五首を楊維楨『覧古』詩と比較して気付くのは、杜甫は五言古詩のつもりで作っているのかも知れないが、五言律詩並みに対句が多いということである。其一の冒頭の「蟄龍は三冬に臥し、老鶴は万里の心」にしてからが、厳格なものではないが、対句である。対して『覧古』詩は対句が少ない。意図的に対句を避けているようである。楊維楨にとっては、対句表現は、近体詩で十分出来ることだから、五言古詩で多用する必要はないということであろう。近体詩の規律に縛られない、古詩でしかできない表現に挑戦すべきなのである。

『覧古』詩ではないが、楊維楨の五言古詩に「三叟者訣」というのがある。(『鉄崖先生古楽府』巻二所収「三叟者訣」)

「道に三叟なる者に逢う、高寿は神仙に比す。叟に問う何を以て寿なるか、寿訣倘しくは予に伝えよ。上叟前みて詞を致す、大道にして天全を抱く。中叟前みて詞を致す、寒暑は節に順って宜ぶ。下叟前みて詞を致す、百歳半ば単り眠る。是れ三寿の訣と為す、能く長年なる所以なり」

『南壕詩話』(明　都穆撰『知不足斎叢書』所収)にも指摘があることだが、この詩は百一詩で著名な応璩(『南壕詩話』は建安の七子の応瑒に誤る)の詩をほぼ踏襲している。今『先秦漢魏晋南北朝詩』(逯欽立輯校　中華書局　一九八三)「魏詩巻八」「応璩」の項から引く。逯欽立氏は百一詩の一つと見なしている。

「古えに道を行く人有り、陌上に三叟を見る。年各の百余歳、相い与に禾莠を鋤す。往き前みて三叟に問う、何を以て此の寿を得たるか。上叟前みて詞を致す、室内の嫗貌醜し。下叟前みて詞を致す、夜臥して首を覆わず。要なる哉三叟の言、能く長久なる所以なり」

『南壕詩話』もこの話を引くが、少しく字句を異にする。上叟と下叟の間に、「二叟前みて詞を致す、腹を量りて受くる所を節す」とあり、三叟そろうのが人口に膾炙した形だったであろう。

三叟がひとり一句ずつ、長寿の秘訣をいう。「前みて詞を致す」を三回繰り返す。古拙な表現であるが、民謡調とい

うか、独特な雰囲気がある。これが、五言律詩では、対句や平仄の規律に縛られて表現が難しい。もし表現し得ても、それは非常に凝った高度なレトリックということになりもとの古拙さは失われよう。もちろん、五言古詩であっても、杜甫のように対句を多用し、レトリックに凝るタイプならば、古拙さから遠くなる。当たり前のことのようだが、案外、こんなことが楊維楨にとっては大切だったのではないか。

古拙さをわざと装っているとみられる『覧古』詩を追っていこう。

「子を知る石司徒、財を分ちて斉奴に靳しむ。諸仲に財は如かず、財窮りて東市に誅せらる。吁嗟石司徒よ、子を知ること良に愚かならず」（『覧古』詩其二十二）

知子（石崇、幼名斉奴）、石司徒（石崇の父石苞）を無造作に繰り返す。一、二句で石苞が石崇に財産を分けるのを惜しんだという故事を引き、三、四句で石崇は命数に恵まれなかったと述べ、五、六句で結局石苞は賢い選択をしたと結論づける。この、起承転結ならぬ、三拍子の単純な論理の運びをおそらく楊維楨は愛した。それはもちろん四聯の五言律詩で表せるものではない。また、五言絶句では短すぎる。

「秦穆は盗馬に飲ましめ、楚荘は絶纓を忘る。斉景一木に恩あり、槐に触るれば淫刑有り。婧女は斉相に告げ、称説辯にして且つ正。明朝槐を抜くの令あり、婧父（もと父に作る『楊維楨詩集』によって改める）は囚名を脱る」（其三）

秦穆王と楚荘王とを対句にして、彼らの寛仁であった故事を述べた後に、斉景王が狭量であった故事を続ける。一、二句めが対句で、三句以後がそうでないというおもしろい構造も、五言律詩では難しい。

「武丁は良弼を夢み、象を審かにして冥搜を極む。光武は人物を思い、物色して羊裘に在り。彭城に処士有り、君恩は林邱に賁たり。股肱は用を為さず、顔色徒らに相い求む」（其十六）

一、二句と三、四句が隔句対という、駢文のような構造。これが全句の半分を占めるというのも、五言律詩ではまれ。

「姚家に裨将有り、腰に双の青萍を佩ぶ。青萍は夜匣を脱し、忽ち程務盈を殺す。為に殺すを報ずる状を書き、剣に伏して随いて自ら刑す。吁嗟古えの義士、豈に復た荊卿を数えんや」（其三十八）

五言律詩と同じ五十六文字でありながら、対句を一つも用いない。淡々とした語り口である。

「単父七弦の琴、治を為すこと感興に務む。十金南門の木、令を立てて必ず行うに務む。単父は成効有り、夜漁厳刑の若し。南門能く木を徙すも、民情を徙す能わず。此を以て知る巧信は、拙にして而して誠なるに如かざることを」（其四）

対というわけではないが、一，二句が子賤の善政を述べ、三、四句が商鞅の法家的政治を述べる。そして、また、五、六句で子賤の成功、七、八句で商鞅の失敗を述べ、九、十句で、子賤が商鞅に勝ると結論付ける。レトリックといえばレトリックであるが、詩としての凝ったレトリックではなく、余人はこのようなあまりに論証的な詩は作らないので、読者をして奇異の感を生ぜしめ、なるほど奇人の楊維楨にふさわしい奇作だと思わせるという点で成功を収めたレトリックである。詩的でない詩であって、古拙といってよいであろう。

「郭麟は術数に精なり、知る晋必ず秦を亡ぼすと。秦を逃れて遠く晋に帰するに、追兵は亡臣を殺す。洛陽の牛背叟、読書して其の親に孝なり。涼州未だ破るるを経ざるに、先に帰ること忽として神の如し。術人已に霊ならず、哲士固より身を全うす」（其三十）

これは、郭麟が占術に優れたにも関わらず殺されたという、一句から四句に対して、孝行で勉強家のの牛背叟（遺憾ながら何者かをつまびらかに出来ない）が難を逃れたことを五句から八句で述べ、九、十句で哲士が術人にまさると結論する。これまた、古拙を装っている。

「応侯は刻薄なる人なるも、須賈は死ぬる無きを得たり。飛将は覇陵を殺す、狼狠歯するに足らず。如何ぞ画眉郎の、五日にして掾史を殺すに」（其六）

范雎（応侯）と李広（飛将）と張敞（画眉郎）三人の、敵に対する酷薄さを比べる。三人についてそれぞれ二句ずつ並べただけの小詩。単純といえば単純だが、敢えてその単純を犯したのが創意であろう。

「韓厥は趙僕を戮し、私を以て公を害せず。後人は此の義を援りて、往往にして逢蒙為り。曲逆は本に背かず、主に事うるに忠を移す可けんや。偉なる哉劉公の論、呂布は真に容れ難し」（其五）

これも、五人の言行を並べたもの。五言律詩で固有名詞をこんなに並べることは普通ないであろう。

「琴を弾ずる戴安道、焦桐は奇声を破る。蔚宗と文季とは、倶に琴を以て自ら鳴る。天子屈するを得ず、王公聆く能わず。独り憐む褚司徒、銀柱斉伶に老うるを」（其二十四）

同様に琴の名手を四人並べて、それぞれの処世を比べる。

以上引いた詩は、各句の配置の妙とでもいうべきものを追求している。ここで思い出されるのは、李白の二首の『覧古』詩である。二首とも、「只今惟有」の字を共有するが、それをどこに置くかというところに李白の企みがあったに違いない。『蘇台覧古』では、現在の目前の遺跡を述べて、第三句で、「只今惟だ西江の月有るのみ」と転じて、過去に思いを移す。逆に『越中覧古』では、過去の事績の幻想が三句まで続いた後に、末句で、「只今唯だ鷓鴣の飛ぶ有るのみ」と目前の遺跡に視線が帰ってくる。遺跡を前にした時間の推移の感覚を、句の配置を工夫して何とか表現しようとする、李白の探求心を筆者は感じる。

同様に、楊維楨の『覧古』詩も、おそらく、独自の史観の創出に重きをおいているのではなくて、歴史を読んで感じる表現しがたい自己の感懐を、如何に表現し、文字として定着させるかに主眼があった。その感懐は、近体詩や長編の古楽府では表せない何かである。それは、近体詩に比べれば自由な、古楽府に比べれば短小な、五言古詩にして始めて表現に近づけるものであった。そして、その表現をめざして、楊維楨は、この『覧古』詩において、句の配置などいろいろな方法を試しているのだと思う。

呉復が「詩法」といっていたものは以上のようなものだという仮説を筆者は立てるのだが、それは古拙をわざと装うような底のものであって、やはり文学的価値からすると乏しいことは否めず、評価されることなく現在に至っている。

五

楊維楨の『覧古』詩が文学的価値に乏しいことは筆者も認める。楊維楨自身もそれは重々承知の上であろう。しかし、それでも敢えて『覧古』詩を確信犯的に制作した楊維楨の意図を考えてみたい。

歴史というものは、思ったどおりに動かすことはもちろん、ある一つの史観で全てを把握することも不可能である。つまり、歴史というものはすぱっと割り切れるものではない。歴史は矛盾に満ちており、過剰な無駄や脇道にあふれており、逆に尻切れトンボに終わることもある。歴史を表現して、綺麗にまとまるとしたらそれは嘘だ。歴史に惹かれ、何とかエッセンスをつかみきろうとするのだが、その努力は常に裏切られ続ける。その徒労感、不全感。それを自覚する自分に嘘をつかないということに、楊維楨の『覧古』詩における志向を筆者は読みとりたい。不全感などというものは、表現し得たとしても、読書を感動させるような、文学的な価値の成就はおぼつかないものであろう。それでも、この不全感に接近する表現を楊維楨はのこしておきたかったのだ。

こう考えると『覧古』詩の特徴の由って来る所がわかるのではないか。

先に『覧古』詩其一は、史実をまとめたものに過ぎず、楊維楨の独自の主張はないといった。一史観を表立って主張するよりも、まずは淡々と原典の言葉を短く並べる表現法を採用した。するとどうであろうか、「三歳爾の大期ならん」という周郊婦人の言葉が、浮き上って聞こえるではないか。あたかも、巫女の託宣のようなのろわしい言葉として。その、おどろしい雰囲気こそ、楊維楨が原典で強く感じたことであった。雰囲気というものは、言葉を尽くせば表現できるというわけではない。

李白の「覧古」を模倣したのは、史実について、教訓や感懐をあらわに述べず、冷酷な歴史の前でただ傍観するしかできない、その不全感に似つかわしい表現手法を導入したかったからだと思う。

杜甫については、ねじ曲がったオマージュを捧げているといった。歴史をもはやすっきりと受け取ることの出来ない楊維楨は、杜甫のように素直に人物に同情することが出来ない。人物の闇の部分にどうしても目が向けられてしまうのだ。杜甫を尊敬しつつも、もはや杜甫のように詩を作ることは出来ないという自覚が透けるような気がする。

『覧古』詩の詩法は決してすばらしいレトリックとはいえない。短く古拙な叙述に終わったり、ただ数人の事績を並列するのだが、その配置が何とも拙劣で、普通の対句と比べると、洗練に欠けているのは明らかである。しかし、先述したように、歴史というものは本来綺麗にまとまるものではないのである。

さて、楊維楨の『覧古』詩の掉尾を飾るのが、文天祥を詠んだ、其四十二である。

「要離は妻子を爇く、大盗空しく古名あり。峨峨たる南文山、光焔日月青し。婦義は総て一醮、臣道は改更する無し。寧ろ一天を戴きて死するも、二地に載りて生きず。尚お憐れむ広西の弟の、顔家の兄に愧ずる有るを」

文天祥を褒め称えた詩である。といって、決して反蒙古の詩ではない。文天祥等元に抵抗した文人を称えることは、この時期の江南の詩人としては普通のことである。問題は文天祥に関する部分ではない。冒頭と末尾に、ややぎこちなく加えられた部分である。

要離は、春秋時代のテロリストである。呉の公子光が王子慶忌を殺そうとするに際して、自らの妻子をわざと公子光に殺させて、公子光に恨みを抱いているように見せかけて、慶忌のもとに走り参謀となる。後慶忌を暗殺しようとするが失敗する。（四部叢刊本『呂氏春秋』闔閭内伝）文天祥の忠義を、二君に仕えた要離と対比する趣向であろうが、何かおかしい。要離と文天祥の立場、境遇はかなり違うし、「妻子を爇く」非人道が強調されていたりして、どうにも、冒頭二句と、それ以後の関係がしっくりこない。

末尾二句は、広西恵州でモンゴルに抵抗した従弟璧が、兄の忠義にならわず、結局帰順したことを指す。彼ら兄弟は、安史の乱に際して忠義を貫いた、顔杲卿、顔真卿兄弟のようにはいかなかった。璧が元に降伏したことについては、例えば『文山先生全集』（四部叢刊本）巻十七「宋少保右丞相兼枢密使信国公文山先生紀年録」庚辰の条に、「是歳囚」とあって、次のようにいう。

「五月弟璧は恵州自り入覲す。右丞相帖木児不花は其の略を奏して曰く、此の人は是れ文天祥の弟なり。上曰く、那箇（いずれ）か是れ文天祥なる。博羅は対えて曰く、即ち文丞相なり。上は嘆嗟之を久しくして曰く、是れ好き人也。次いで璧を問う。右丞相奏すらく、是れ恵州城子を将て附する底なり。上曰く、是れ我に孝順なる底なり」

弟が裏切り者だったのを憐れむ、と詩を結んでしまっては、あまりに物足りないのではないか。弟を批判するにしても、もっと字数を費やし、文天祥の偉大さを対比強調すべきではないか。これでは、尻切れトンボである。だが、楊維楨のつもりでは、このように、尻切れトンボで、割り切れなくあってこそ歴史なのである。要離、顔兄弟、文兄弟は本

来うまく対比できない組合せである。無理に対比すると、このように詩的成就をそこなうこと甚だしい。その犠牲を払ってでも、楊維楨はこの詩を作りたかった。その無理さにこそ、歴史の本質があるからである。

六

最初に述べたように、一般の評価からすると、『鉄崖先生古楽府』巻八に収められた『覧古』詩は、巻九の五言絶句の作品群には及ばない。

『詩藪』の「元」から、関連する項目を引いておく。

「宋楽府小詩は殊に寡し、元は酷だ伝奇を尚ぶ、諸大手の集中にも亦た覩ること罕なり。惟だ楊廉夫のみ才情は縹渺として、当代に独歩す、名下の士は信に虚しきこと無き也。……（楊維楨の五絶を引く）・・・の如きは、率ね超異にして神俊、謫仙を追蹤す、宋、元の語に非ず」

「楽府小詩」というのが、五言絶句に当たる。この分野では、楊維楨は元代において「独歩」していたという。

「老鉄詠史は、……の如きは、此の類甚だ衆し。亦た大いに是れ伎倆の人なり。然れども惟だ二十字ならば可なる耳、更に八字ならば便ち晩唐に入る。自余の大篇は、議論愈よ工みに、格調愈よ遠し」

ここの「詠史」は五言絶句のそれをいう。八字ふやした七言絶句の作品は、晩唐風で余りよくない。長編の古楽府はもちろん称揚すべきものである。

「元五言古は作者甚だ希なり、七言古は諸家多く善し。五言律は、傅与礪冠と為す、楊仲弘、張仲挙之に次す。七言律は、虞伯生冠と為す、揭曼碩、陳剛中之に次す。五言絶は、楊廉夫冠と為す。七言絶、名篇は頗る衆し、楽府体は亦た楊を出づる無し、第だ之を総ずるに元調を離れざる耳」

五言絶句の名手として、楊維楨の名前のみを挙げる。

楊維楨自身も、五言絶句の成功に自負心を持っていた。門人章琬が呉復を継いで編んだ別集『復古詩集』巻二、それ

は、四部叢刊本『鉄崖先生古楽府』巻十二にあたるが、その巻の冒頭に、楊維楨の言葉を引く。

「先生自ら言う。予は三体の詠史を用いる。七言絶句体を用いる者は三百首、古楽府体なる者は二百首、古楽府小絶句体なる者は四十首。絶句は人到り易し。吾が門の章木之を能くす。古楽府は到り易からず。吾が門の張憲之を能くす。小楽府に至りては二三子は能わず。惟だ吾のみ之を能くす。故五峰李著作は推して詠史の上手と為すと云う。至正丙午夏五上吉門生章琬手ずから識す」

詠史のジャンルにはいっておかしくはないはずの、『覧古』詩がそうである五言古詩体が、楊維楨の所謂「三体」に入っていない。彼にとっても『覧古』詩は価値無きものと見なされていたのだろうか。

筆者はそうは思わない。『覧古』詩は、長編の古楽府と短編の小楽府との間にあって、両者に出入しつつ、独特の価値をもつものである。ただ、「歴史に対する不全感」という消極的なものを表現対象としているので、興味ある素材と圧倒的な文学性を有する、古楽府と小楽府の間に埋もれてしまった。それでも、この形式でしか言えなかったことを言い切ったと、楊維楨はある程度満足したのではあるまいか。